**高木　晴子（たかぎ・はるこ）**

**１、プロフィール**

俳人。高浜虚子の５女。横浜フェリス女学院卒。京都の句会で初めて俳句を作る。虚子に師事。「玉藻」代選を経て、昭和59（1984）年俳誌「晴居（はるきょ）」を創刊。主宰を務めた。

＜生没＞

1915(大正４)年１月９日　～　2000(平成12)年10月22日

＜代表作＞

みちのくの帰雁に夜風悲しとも

空の色うつして雪の青きこと

初蝶は影をだいじにして舞へり

『高木晴子句集』昭和26年楡書房発行。序文高浜虚子。『晴居』昭和52年玉藻社発行。『高木晴子集』昭和53年俳人協会発行。『みほとり』昭和57年東京美術発行。文集『遥かなる父・虚子』昭和58年有斐閣発行。

＜青森との関わり＞

夫、高木良一が日銀青森支店長として赴任したことから昭和23年９月から昭和26年５月まで３年間青森市に在住。

**２、作家解説**

神奈川県鎌倉生まれ。父、高浜虚子。母、いとの５女。昭和７（1932）年、横浜フェリス女学院卒。この年、虚子に連れられて京都に行き、初めて俳句を作り、句会に出る。以後、虚子に師事。昭和９年、高木良一（日本銀行勤務）と結婚、大森山王に居住。昭和19年、太平洋戦争中は虚子一家と共に長野県小諸に疎開。昭和20年、夫の転勤に伴い秋田市に移住。初めて自分の句会「柿の花」を持つ。昭和22年、〈風荒き夜風に雁の帰るかな〉〈みちのくの帰雁に夜風悲しとも〉を詠み、ホトトギス７月号の巻頭となる。昭和23年９月、夫、青森へ転勤、浦町字橋本日本銀行舎宅に居住。３年間、増田手古奈、村上三良、佐藤多太子らと句会を持ち、地域の俳句仲間との交流を深めた。10月31日、浅虫温泉東光館で歓迎句会行う。〈氷雨降る温泉宿の庭の小菊にも〉を詠む。昭和24年４月22日～27日、青森放送から「季節の感覚―俳句を通して」〈北国に今来し春を身に受けぬ〉〈着ぶくれて津軽の人になりすまし〉を放送。昭和24年、ホトトギス同人となる。虚子、姉星野立子、宵子らが青森訪問。昭和26年５月８日、夫、東京栄転の送別会が催された。〈をりからの落花の舞へるその中に〉を詠む。昭和43年５月、北南米の旅、８月青森の旅。昭和45年６月、新潟、北海道、青森の旅。10月、立子倒れる。昭和46年１月から立子「玉藻」の雑詠代選を昭和58年６月まで行う。昭和54年５月、ロンドンキューガーデンに虚子の句碑を建立した功績は大きい。昭和58年、山寺全国俳句大会選者となる。昭和59年１月、「晴居」創刊、主宰となる。〈来し方を行く方を草朧かな〉の句碑除幕。昭和48年、若手育成のため「若藻」発刊。晴子選百号まで続く。平成12（2000）年10月７日～９日、晴子一行が青森・函館３日間の旅。青い海公園周辺吟行、三内丸山遺跡見学、浅虫温泉へ。〈夕づつをかかげ暮秋の津軽富士〉を詠む。10月11日、鎌倉市内の病院に入院し、22日、永眠（85歳）。戒名は秋高院良詠晴居大姉。